

# 諸方面よりの躾

## 躾の教育理論

—その基本的理解のために—

### 倉橋三物

#### 一、躾の意義

#### 二、躾の歴史

#### 三、幼児教育の場合

#### 四、躾の内容

#### 五、躾の作用

#### 六、躾の教育的成果

#### 一 脡の意義

子きもの成長は、或る意味に於ては自然である。内なる

自然の力によつて、自然の發達法則に従つて、なるようになつてゆくのである。

そのなりかたはいろいろであるが、成長の常態としては、生育であり、増大であり、強加である。そこに自然價値の發展を認めることが出来る。若し子きものが單に自然物であるならば、それはそれでいいであら

う。  
しかも子きものは、自然界のものではなくして、人間社會のものであり、人間文化界のものである。社會と文化界の中に影響せられつゝ、社會の一員となり、文化價値の所有者となるのである。社會の一員となることなしに一人前になれないし、文化價値をもつこなしに、生き甲斐もない。而してそれは自然のまゝの成長だけでは得られないことである。  
社會と文化とは、自然そのものではない。従つて、自然に對しては、それらの規範を以て臨むことになり、規範的に律することになる。即ち成長が自然のまゝに任せられないで、社會と文化との規範を以て律せられてゆくところに、躾けがある。

この意味に於て、羨は社會的文化的のものであると共に、外からの他律性のものである。前者に羨の内容的力が存し、後者に羨の形式的力が行はれるといへる。いづれにしても、羨は、なるようになるのに比して、強要性のことである。同じく強要性のことであつても、内容的の方面と形式的の方面では、その強要に別がある。社會的、文化的といふことは、自然そのものでないことは言ふまでもない。従つて、既成の規範として自然に對するのであるが、しかし又考へてみると、人間がもつ社會的、文化的のものは、人間からつくれたものである。人間本性以外のものではない。すなはち、既成の規範としては、人間の自然性に對し、殊に未成の幼少者に對し、全く別のものとして外にある如き隔りをもつてあらうが、その本質に於ては、必ずしも全く別のもの、外にのみあるものではない。そこには、本来の一致性、いふよりも、寧ろ共通性といつていゝものが存在してゐる筈である。この點で、社會的、文化的規範は内容的には、子ぎもの中にある人間的自然性に對して、ただ外からの力としてのみはたらくものでもない、見られる。教育は人間を對象としてゐることで、その羨も亦、人間でない自然——植物や動物——を型づけてゐることはちがふ事實である。羨の内容力にはこの特色が考へられずにはない。

同じく強要性のことであつても、内容的の方面と形式的の方面では、その強要に別がある。社會的、文化的といふことは、自然そのものでないことは言ふまでもない。従つて、既成の規範として自然に對するのであるが、しかし又考へてみると、人間がもつ社會的、文化的のものは、人間からつくれたものである。人間本性以外のものではない。

さて、いづれにしても、羨は自然の成長そのまゝではない。自然のまゝには放置しないし許容しない。子ぎもを人間社會の一員たらしめ又文化生活者たらしめるために。——羨けなしには、たゞ自然的成長があるだけだからである。

これに對して、形式的力としての羨は、全く外からの作用であり、強要そのものであり、強制的に他律せられるこそである。この場合、子ぎの自然の成長が、その規範と反馳し、矛盾することが豫想せられたり、目の前に對立させられたりすることが多い位である。そこで、羨の不自然性（自然の成長に對して）や、一種の無理強ひまでもが、羨けられるものにも、羨けるものにも、羨の過程を眺めてゐるものにも、ひしき感じられたりするのである。羨といふ言葉から感じられてゐる一般の響は、この力の響である。

二、羨の歴史

以上の意義に於て、羨は教育の當然であり必須である。教育が自然そのものでない限り羨なしの教育はないのである。

しかし、教育の實際にあつては、羨はいろいろの位置に置かれ、又、相當いろいろの異つた目で見られ來たつた。ここで教育の史的興味として之れを詳述する必要はない。

が、今日、今更の如くにも躰が強調せられ、重視せられてゐる所以を理解するには、この歴史を辿つてみることも一つの途である。

その歴史には、大體三つの大きな時期を區劃するところが出来る。第一の時期は、外からの力一方で教育が考へられてゐた時代である。假りに之れを、教育の他律一方時代とも名づけようか。教育の目的の要求するところに基いて、子さもを——彼等自身には何んの自力成長もないものの如く考へて——型へ押し込み、外から押しつけてゆくところだけが教育だと考へたのである。それは日本でも、外國でも、古い時代の一般の傾向であつたといへよう。そして、かういふ考へ方の偏に行はれたのは、一面、教育目的の要求力の強かつた爲もあるが、又一面には、子さもの自然成長力に對する正しい知識が無かつた爲である。教育目的はいつの教育でも熱心であるとすれば、後の方の理由が主になつてゐたものと考へていゝかも知れない。

これに對する第二の時期は、子さもの自然成長力に關する知識が進んで、それを尊重することだが、前の時代への反動的強さを以て強調せられ來つたのである。子さもの研究の進歩の點からいへば、科學主義になつたといへる。外からの強制がゆるめられた點からいへば、自由主義といはれたりする。子さもの自然成長を偏重する反動性からは、児童本位主義だの自然主義だのといふ言葉さへ行はれた程である。而して、その實行として、躰が輕視される傾向になるのは免れ難いことであつた。

此の傾向は、前の時期の傾向に對する反動としての行き過ぎがあるばかりでなく、教育といふことをの理からいつても、行き過ぎてならないことは勿論である。そこで、それを正しさに置かうとする堅實な教育觀は、當然起つて來ざるを得なかつた。之れが第三期に入る理論上の順序である。そこへ、教育目的の今日の強化の時代が來た。子さもの自然成長だけに任せて置いてならなくなつたと共に、その自然的さが、自由的さかいふ教育過程のもつ教育性そのものが許されなくなつた。そんな原理、そんな過程で、國民鍊成は期し難いからである。これが今日である。

### 三、幼兒教育の場合

躰の歴史としては、教育全體を通じて、以上の如き變遷が見られるのであるが、特に幼兒教育の場合には、對象が幼兒であるだけに、その時期にても、その傾向の一段と著しくなる趣を免れない。

すなはち、第一期的の傾向は、幼兒の心身の幼弱さに於て、その教育は外からのみ可能といふことに考へられ易い。そこで、躰が必要であるといふよりも、躰の他にその教育はあり得ないとい考へられたり、又、躰の最好適年齢、

いいよりも寧ろ、躾の最容易年齢を考へられるこにない。その結果、躾が教育の方法として考へられるよりも、躾けるか（即ち教育するか）教育しないか（即ち躾けないか）の二つに對立されたのである。従つて、自由とか自然とかいふことを、教育の方法としてよりは、教育しないこと、教育しないがよいといふことをして根本的放任放置主義であつたり、又その反対に、躾けるとなると、無制限不自然の強要や無理や無茶さへが行はれ勝ちであつた。

幼稚園の教育原理が、幼児をこの放任と無理から救つたものであることは、こゝに再説を要しない。フレーベルの先駆的明識は、その點で顯著なるものである。しかも、それが前述の第一期から第二期への移行過程の反動性や急速性のために、フレーベルの教育的明識を超えての行き過ぎ走り過ぎる傾向を生じた。殊に、教育精神よりも、教育

としてのそれではなく、自然の爲の自然、自由の爲の自由、そんなことは、荀も教育精神あるものゝ考へる筈のないこであるが、幼児教育の第一期的弊害のは正の爲さ、そこまでも幼児教育の方法上の一つの特色として考へられてゐることが、幼稚園内部にも外部にも、よく理解せられなかつたりした。さうして、遺憾なことは、事實上弊害をさへ生じたのであつた。

かうした誤まれる傾向、憂べき傾向に對して、革正が行はれなければならぬことは勿論である。識者の間に、憂慮と警告の聲が漏らされたのは當然である。教育審議會が幼稚園の重要性を議決すると共に、躾を重んずべきことを明示したのは、恰かも此の時であつたのである。次いで國民學校が躾の尊重を以て自らその教育方針とした。そして、國民生活體制の強化を必須とする大東亞戰下の今日の教育になつた。幼稚園の場合、躾は斯うして、その保育の重點となつたのである。

（つづく）

## 我の國の武士の躾

東京女子高等師範學校教授

石川謙

一口に武士と言つてもそれには色々の場合があるから